

# 曹洞宗の僧侶が新宿二丁目のゲイバーでマスターになった話

熊本県泰陽禅寺副住職 本 多 清 寛

## 自己紹介と新宿二丁目に向かった理由

本多 本日は『曹洞宗の僧侶が新宿二丁目のゲイバーでマスターになった話』というところで、自己紹介からさせていただきます。よろしくお願いいたします。よろしくお願ひいたします。

昭和六十年、一九八五年生まれなので、今年、三十五歳になります。お寺の長男として生まれました。高校は浄土宗の高校だったので、その後、駒澤大学に入学しまして、駒沢の竹友寮という、得度をしていないと入れない、大変、体育会系の寮に入寮して、卒業後は永平寺（曹洞宗の本山僧堂）にて三年ほど修行いたしました。実はかなり曹洞宗的にはストレートに、ある意味エリートコースみたいな歩みなのですが、それがそのまま曹洞宗総合研究センター（以下、研究センター）に入って宗学、仏教学、またその座学で得た知識を社会に伝えるためのアウトプットの方法などを学びました。そういうわけで曹洞宗の中では結構まともに見える人生を送ってきたはずなのですが、ひょんなことからゲイバーのマスターになる等の色いろな経験をさせてもらっております。

実は、大学のときにもNPOでボランティア活動をさせていただきました。『NPOカタリバ』というところなのですが、そこで三年ぐらい活動したおかげで、世間で色いろやってみるための下地ができたような気がしております。また後ほどお話ししますが、ゲイバーのマスターになることも、そんなに気負いがなかったような気がしております。

さて、まずどうして私が新宿二丁目に向かったのかという同性婚について知りたかったからです。研究センターで私が研究していたのは、仏前結婚式でした。そもそも何時から始まったのだろうか、どうして宗教者が結婚式をするようになったのだろう、みたいなことを少しずつ調べていく中で、二〇一五年に渋谷区で同性パートナーシップ条例ができて、なるほど同性婚というものがあんないうことに気がつきました。

そこで同性婚が、例えば曹洞宗では教義的に一体どういう解釈になるのだろうかと考えました。結婚式の法要として実際行っていることは、勧請や簡易的な授戒になります。その点で結婚する二人が同性であろうが、異性であろうが、何ならある意味、人間の形をしてなろうが、特に問題ないわけです。その二人がすっかり一生懸命やっていますよということを応援する儀式だと私は理解したのでした。ですから同性婚については全然問題なろうと思ったものの、では実際にやりたい人がいるのかということを考えたわけです。その同性婚を行いたい人が本当にいるのかどうかを調べに、というと失礼な話なんですけれども、まだこの時点では、ゲイの方、要するに、目の前の人が「私はゲイです」と社会に向けて話せるような時勢ではなかったので、一回行ってみないといけないのではないかと思って、二丁目に向かったということになります。

## 無知ゆえの過剰反応

さて時は二〇一五年春一番が吹いた後のことでした。新宿二丁目のメインストリート、仲通りというところに到着しました。新宿三丁目駅から歩いてくると、ビルに男性が二人寝転んでいる大きな看板がありました。

初めてこの町に降り立った私は、まずこの看板にやられてしまいます。そして、目当てのゲイバーに行くわけですが、この時大学時代の友達二人連れて行きましたが、細かい説明などほとんどせずに、「とりあえず新宿に集合してくれ」と二人には伝えました。集合してくれた二人を「じゃ、行くよ」って言って、連れて行くんですけども、到着

したら「一体なぜ、俺らはここに連れてこられたんだ」と私にブーブー文句を垂れてきました。「いいから、行くんだ」と。

ゲイバーには、MIXバー、観光バー、それからゲイオンリー、ゲイ専門のお店、大体三種類ぐらいあるんです。そのうちの観光バーっていうのが、初心者向けのというところと少し変な表現ですが、普通（と自分では思っているだけ）の人向けに、テレビの中でイメージされる「楽しい楽しいオカマ」を演じて下さる方たちが接客をする店です。そこに二人を連れて行こうとしました。結構狭い階段があつて、二階奥の方のお店だったので、まず階段を上るのが怖くて、三人で、階段の前でぐるぐる回りながら、「おまえが先に行けよ」「いや、おまえが先に行けよ」とか言いながら、最終的にじゃんけんをして負けた私が扉を開けました。自分で連れて行つたくせにです。

私自身、自分の中に、ゲイ、あるいはオカマとか、そういうイメージがあまりなかったもので、ずっと馴染むのではと思っていました。けれど、実際に二丁目に着いたら、手を組んだ男性二人が楽しそうに歩いていたりとか、ただそれだけであつても、ちょっと怖い強面のムキムキの人がいたりして、正直に言えば怖かったですね。無意識に、本当に何も知らないわけです。そうすると、いきなり襲われたらどうしようとか、席に着いて、言い寄られたらどうしようかな、とか。湧いてくる不安に、どうしようかな、どうしようかなと震えている自分に気がつきました。

ずっと馴染むどころか、実際行ってみれば、こんなもんなんだな自分は、ということに気がつきました。

## 「私が末代よ」の衝撃

「私が末代よ」。これ、なかなか良い、すごい台詞だなと思います。初めて行つたお店はテレビにも出たことがあつたところでしたが、店に入ると誰もおらず、カウンターの奥の方に座らせてもらうことができました。時間が午後七時ぐらいで、一般的にバーの営業って大体九時くらいからがメインなんです。なので、幸運なことにまだあまり人

もいなくて、結構いろんなことをしゃべってもらえました。

時間が経つと段々とお客さんが来るようになって、私たち以外のお客さんの声も聞こえるようになってきました。その時に「私が末代よ」っていうギャグが聞こえてきたんです。いろんな会話の流れがあった上で、子どもがいないとか、そういう少しネガティブな告白を「末代だから、大丈夫なのよ」みたいなところで落とす展開だったと思います。それを聞いて私は愕然としました。

私はお寺の長男として、本山での修行を経た一僧侶として、今まで法要をしてきました。お檀家さんの家で棚経をすれば、必ずその家の子孫長久・家門繁栄というものを祈ってきました。が、もしかしたら、私の祈ったあの願いは人を追いつめる言葉だったのかもしれないと、この時、本当にお恥ずかしながら、初めて気がついたんです。

子孫を残すことが出来ないといっても、養子制度があります。直系の家系といっても、血縁がなくて全く問題ないはずです。だからこそ、子孫長久や家門繁栄を祈ることは、誰にとっても良いことだと考えていました。それはそれでよいのですが、この「私が末代よ」という言葉は、自分が絶対に家を繁栄させられない存在であるという諦めを前提にしているように感じました。だからこそ「どうぞ、家門繁栄してください。あなたを引き継ぐ子孫が長久でありますように」と願い、その前提で話していた私は「自分自身を家系を終わらせてしまう存在であると考える方々を傷つけてきた坊主なのかもしれない」と、ここで初めて気がつきました。

## 「XNUMJ」プラン

末代の気づきを得た私は、一か月ぐらい、週に一回ぐらいですかね、いろんなお店にお伺いをするっていうようなことを続けました。同性婚についていきなりは聞かないですけど、隣のお客さんと仲良くなったりすると、「実は、僕、お坊さんで、こんなことを考えているんですけど、どうですかね」とか話を振って、失礼にならないように、本当

に気をつけて聞いていました。そんな中一つのお店にたどり着きます。

一九九〇年代に、ゲイ・ムーブメントというのが起こるんですね。その頃からゲイという言葉が男性同性愛者を指す言葉としてよく聞かれるようになったのですが、これがH I V訴訟の流れの中で、「新宿二丁目はH I Vの巣窟だ」とか言われるようになってしまいます。今のコロナ禍にも通ずるところがあるのかもしれないですが、東京の人が地方に行くと、「おまえ、東京から来たのかよ。あっち行ってくれよ」みたいな感じがありますよね。そのもつとひどい状態になった時期がありまして、その時期に、ゲイの差別をなくそうとして活動していた伏見憲明さんという方がおられます。この方、文筆家でもあって、色々な著作があるので、私もそれをいろいろ拝見した上で、伏見憲明さんが経営しているバーに行ってみました。その頃は私も扉を余裕で開けられるようになっていきますから、カランカランと扉を開けて、「こんばんは」と。そしてボックス席に座らせてもらって、接客中だった伏見さんを、しばらく待っていました。しばらくして「遅くなって、ごめんねえ」と、伏見さんが来てくださいました。

するといきなり「で、あんた、××こファンなの？ ××こファンなの？」って聞かれたんですよ。今は伏せ字にしておきますが、要するに、私らの股の間は大きく分けて二種類に分別されるけど、お前はどっちのファンなのかって聞くんですね、伏見さんは。

ファンっていうのは、狂信的とか、熱狂的とか、そんな意味なんですけれども、男のファンなのか、女のファンなのかっていうことで、人間って男性・女性っていう分け方だけが本当じゃないな、ということに改めて気がついたんですね。それは自分の中の男っていうイメージが壊れた瞬間だったかなと思います。この「ファン」って言葉、本当にいいなと思っていて、男性ファンであったとしても、それはファンであるだけで、アンチではないので、対立をする必要がなくなる。結構、二丁目なんかだと、女性が来ることも多いのですが、お釜に付くお焦げに例えて、そういう女性のことを「オコゲ」と言ったりします。

ちょっと違う話なんです、普段、「いい女」「貞淑な女」を求められているようなオコゲの人は、言い寄ってくる男性を馬鹿にしていたりします。そうすると、女性である自分を求めてこない（女のファンではない）男であるゲイだからこそ安心して喋ることができるといって二丁目に通い詰めたりします。でもその通い詰められている側の二丁目の人たちは（ゲイも男なのに男を馬鹿にしたまま話かけてくることに気がつかないので）「あの女、本当に面倒くさいのよね」と、それをまた馬鹿にして酒の肴にします。ただ、そのオコゲ女性が自分の面倒くささを腹の底から理解し、人間味が出てくれば、お釜とお焦げが一体であるかのように、人と人との人情で迎えてくれる、そんな優しい場所になっている、という状況があったりもします。これはこれでなかなかおもしろい状況ではありますが、ともかく、この「ファン」っていう言葉に出会って、私は、男性とか女性とかっていうことが、自分の中でも凝り固まっていたんだなということに、気がつきました。

その伏見さんから一か月後ぐらいにツイッターでダイレクトメールが来まして、「お店やってみない？」って言われたんですね。伏見さんのバーが『A Day In The Life』というお店で、イベント・バーというわけではありませんが、月火水木に違うママが入り、金土に伏見さんが入って、日曜は副店長が入るといってお店でした。それで月曜が空いていたので、その月曜をちょっとやってみないかと言われて、「月曜日の二丁目寺」っていう名前でやってみるようになりました。

今日の講演のタイトルには「マスター」と書いてありますけど、当時は私自身「ゲイバーのママやることになったんだよね」と同僚なんかには言っていたんですよ。二丁目のカウンターに入るといことは、「ママ」と呼ばれると私は理解してしまっていたので、ママをやると言った途端に、ちょっとみんなから距離を取られた感じがして、元々距離があった人は奥の方でこそそそしゃべってる感じがしたんですね。それで、「どうしたの？」と聞いたたら、「いやあ、本多さんが女装するって聞いたんで、ちょっとどうしようかなと思って」みたいなことを言われまして。それでいろ

いろいろ気を遣わせてしまつて申し訳ないと思つて、「ゲイバーのマスターをやるんだ」と言うようにしましたが、別に女装していたわけではなくて、作務衣を着てマスターを務めておりました。

お店に立つにあつて、まずセクシュアリティって何だろうと考えました。LGBTという言葉が何を意味しているのか、とりあえずそれくらいは言えるようになっておかなければと思ひ、いろいろ本を読みました。医学的な意味、社会的な意味というものを、一応、耳学問として入れておくことをやっておかなければならないと思つておりました。それから「ゲイの文化」、ゲイというよりは二丁目の文化ですね。その中に入れてもらうのだから、自分が常識だと思つているものを一回脇に置いて、二丁目のルールの中でやっていかなければならないと思ひました。それから「ゲイ」というものを絶対否定してはいけない」ということを、強く思つていました。

## LGBTQ VS SOGI

「LGBT」とつていう言葉はかなり有名にはなつていますが、「SOGI」とつていう言葉もあるんですね。セクシャル・オリエンテーション (Sexual Orientation, 性的指向) とジェンダー・アイデンティティ (Gender Identity, 性自認) つて言います。アイデンティティ・ディスオーダー (Identity Disorder, 性同一性障害) で言われるアイデンティティと同じですね。誰を好きになるのか、これが性的な指向、セクシャルなオリエンテーション (SO) ですね。また自分がどういふ (身体の) 方向性を持つていて、どんな性を持つのか、自分がどういふふうに分を認めていふか、というのが、ジェンダー・アイデンティティ (GI) の方ですね。これを省略して「SOGI」なんて言つたりします。たまに論文で使われたりもしますが、私が見る限りにおいては、まだ社会に流行つた言葉にはなつていないようです。(二〇二二年現在、厚労省の職場におけるハラスメントの防止に関する記述に性的指向や性自認が追加されました)



LGBTというのは性の特徴を並べた言葉です。例えばレスビアンであるならば、女性の身体で、女性の性自認があつて、女性に性的指向が向いている。ゲイの場合だと、男性の身体で、男性の性自認があつて、男性に性的な指向性がある。バイセクシャルであつたら、身体は男性・女性でどちらでもいいですけども、性的指向が男性と女性に向く人、など特徴を並べた言葉になります。一方でSOGIっていうのは、あなたはどのような性的指向なんですか、性自認なんですかっていう、そういったものを問ひかける言葉と捉えると分かりやすいかと思います。

例えば私が「SOGIはどうなってますか」と聞かれたら「私の性的指向は女性で、自認は男性ですよ」とお答えします。これは「異性愛者ストレート」と表現したりもします。「ストレート」とだけ言ったりもしますね。性自認が男性で、身体が男性で育ってきた人のことです。あとは、「ノンケ」と言ったりもします。これは二丁目界限だけなのかな、ノンケは。あまり使つてはいないかもしれませんが。

そこでSOGIの考え方を少し理解していただいた中で、皆さんに質問をしてみたいと思います。今、みなさんに見ていただいている有名人四名の写真があります。男装をして男性にも見える性自認が女性の人、女装をしてパフォーマンスする戸籍上は男性で性自認が女性の人、女装をしてテレビに出演する戸籍上男性で性自認も男性の人、女性として活動し女装をしている戸籍上男性の人、この中に、男性は何人いるでしょうか。特に何も説明しませんが、男性でも、なぜ、その人を男性だと思うのでしょうか。まずこの四人の方の装いを見てみますと、女性、女性、女性、男性、男性ですかね。それから、恋愛対象。これ、ネットで調べて見ると、二人は男性、もう二人は男性と公言されてなかつたので、？にしてあります。性自認の自称は、女性、男性、「戸籍以外は女性になりました」とおっしゃる人、とくに説明しない人がいます。戸籍も、一応、公表されたものとすと、男、男、男、女ということになります。

さて、もう一回聞いてみますけども、この中で、男性は誰でしょうか。何人いるでしょうか。男性はどなたでしょうか。みなさん、いかがでしょうか。



一人？二人？なるほど。実は今、男女を判断するにあたって、戸籍を根拠に男女を判断することもありますが、医師の判断に基づいて男女を判断することもあるんですけれども、性別を判断する上で基本的に尊重すべきものが「自称」だとされております。したがってここで我々が男性だと判断できるのは性自認が男性という方お一人ということになるわけですね。

ちなみになんですけれども、「戸籍」というのは、医師からの診断の結果を言っただけだったりします。しかも、インター・セックス、ISなどと呼ばれたり、中性とか、要するに、半分男で半分女と呼ばれてしまっていた人たちがいました。肉体的な意味で両性具有という言葉もありますが、この言葉の意味から考えると両方共に持っていると思われがちです。ただ状態を医学的に見ていくと男性器としても女性器としても機能不全となっているからそういう状態になっているので障害という診断をされることもあります。つまり、性別を二つ持っているのではなく、どちらも持っていないという状態に近いんです。

それから、赤ちゃん、生まれたばかりの子どもにも男性器も女性器も両方ある場合であったり、逆にそれが両方ない場合も時とあります。そういう時は、性器から男女の判断がつきませんから、お医者さんが両親に「この子をどっちで育てますか」という質問があったりするそうです。そうなるこの子は男として育てる、女として育てるという両親の決定で戸籍が決まってしまうということも実際にあるわけです。私はこういった事実を知るまでは、医学的な診断に基づく生物学的な性別は容易に判断できると考えていたのですが、現実には、簡単に明確に性別をつけられないというのが、性別の現実でした。

次に「自称」についてですが、これも、なんか怪しい心配がしています。自分がどういう性別を持っているかということなので、「そんなの、嘘つけるじゃないか」と思いますよね。そこで嘘かどうかということは、当たり前なんですけれど、その人の行動を見ることによって判断します。例えば、今で言うと、法律的にも戸籍を変える時に、実

実際に生活状況を見て、男性として生活しているのか、女性として生活しているのかってということが調べられたりするそうです。

そして「恋愛対象」、自分は誰が好きなのか、どんな人が好きなのか。「装い」はどんな格好をしたいか。「SOG I」をたずねる場合、このような問いになるのかと思います。

ちょっと、まとめてみたいと思います。私たちのセクシュアリティってというのは、まず、身体に性別がありますよね、男なら筋肉質・骨太・精果とか、女なら柔らかか・細み・卵巣とかの特徴があります。心に性別もありますよね、自分が「男だと思っている」「女だと思っている」、大体、皆さん、そう思っておられる。それから、好きになる性別ってありますよね、男の特徴を持つ人が好き、女の特徴を持つ人が好きとかですね。性（セクシュアリティ）というのは、自分自身を考えると、この三つに分かれてきます。さらに男とか女とかと考えている範囲内に実はいろいろな状態があつて、いろいろな形があつて、いろいろな好きになる道筋がある。本当に、ものすごく沢山ある。しかしこの状態の中に、さらに男らしさ、女らしさという社会的性別、これ、「ジェンダー」と呼ばれたりしますけれども、「男らしさ・力強い・出世する意欲・リーダー的な役割」「女らしさ・美しい・家庭を守る力・細やかさ」などのイメージで枠が嵌められている状態になります。セクシャルマイノリティの方々はただでさえ他人と違う特徴が多いのに、勝手なジェンダー（性別制）を押しつけられることで、非常に悩みとか困難が多くなるのではないかと私は思っています。

それから、難しい言葉で言うと、『看護・医学事典第六版』から抜粋してみました。ジェンダーは「男・女らしいと思われる観念。社会文化的な性別。心理的に自分が所属していると思えるもの」とあります。社会的性別と呼ばれるものが、男らしい、女らしい、社会文化的な性別というものになります。それがジェンダー・アイデンティティのほうにも関わってきてまして、そういう社会文化というのは自分も属してるから社会文化として成り立

つわけなので、自分が一体どこに属しているのかを意識せざるを得ません。逆に言うと、男でも女でもないというような性自認があれば、心理的に居場所がなくなる場合があります。

それから、セクシュアリティといったときは、性別を判断するときの特徴というようなことが書いてありまして、ジェンダーとセクシュアリティ、かなり似ているものではありますが、やはり違うということだけ覚えていただければいいと思います。過去形というわけではないのですが、昔、ジェンダーについて男女の差別に関する問題だけが論じられていましたが、それからさらに多種多様な問題、要するに、世界には男女だけじゃないんだよというところで、セクシュアリティの問題と言われることが最近は多くなってきたと思います。

まとめてみますと人間の性には、分かりやすそうなところでまず生物学的性別があつて、その中に性的指向と性自認というものがあつて、社会的性差というものがある。これが虹色のように分かれているということになります。虹を眺めていますと、色が分かれているように見えますが、詳細に見ていくと色と色を分ける線はなく、段々と次の色に変わっていることが分かります。ちなみにレインボー・プライドと呼ばれる、LGBTsとかQとかそういったセクシュアルマイノリティの方々が登場するときの旗に使われている色になります。

## 「二丁目捨てるものなし」

そういったわけで、私はゲイバーのカウンターに立つことになりました。今、皆さんにはセクシュアリティの勉強を少ししていただいたので、次はゲイの文化というものに少し触れていただきたいと思います。

文化その一、「二丁目に捨てるものなし」。これは、どっちかっていうと、下ネタに近い話です。皆さんの中には、今はそう思っていないかもしれないですけど、モテたいっていう人もいると思うんです。二丁目に行くと、誰も捨てられずに、誰かがおいしくしてくれるっていう言い伝えがあります。お店で話しているとモテるタイプや好みの話にな

ることがあります。そこで、自分はモテないということを主張すると、こういうことを言われたりするわけです。「大丈夫よ、本多さん。二丁目には捨てるものなんか、ないんだから」と言われるわけです。そのときに、僕は一体、どういう身の振り方をしなければならぬのでしょうか。一つは、流れに身を任せてしまう。

それから、二つめは、逆に、自分はゲイではないと分かっているながら、でもカウンターに立つ限りはそういうものも必要なかと思つて、ゲイの振りをしてみて、結果的には流れに身を任せることになるかもしれないですけど、やってみるつていう選択肢もある。それから、お坊さんの格好でやってみましたんで、宗教上の理由で断る。断つてもいいんですけど、その断り方によつては非常に相手を傷つけるし、そもそも二丁目で店を開けているところまで、普通に断るのは、やはりおもしろくないです。これは、お店として、二丁目に飲みに来てくれたお客さんに対して、だいたい失礼な話になると思つていました。あとは正直に嫌だと言ふ選択肢もありますが。これらはみな一個人の話で普遍化できるものではありません。

とりあえず私が何と言つただけお答えしますと、「いやあ、今はちょっと性欲がわかないので、来年に期待つてことでお願いします」みたいなことを言つてました。「別にあなたの今の指向性とかあり方を否定ということではないんですけど、今、僕、そんな気に、要するに、リング食べたい時期じゃないので、来年リング食べたくなくなるかもしれないから、また持つてきてくださいね」みたいな意味合いで場を取り繕うというか、そこで一つおもしろいのを作る、みたいなことをやっております。

## 同性愛への評価

こういつたことで悩んだ理由として、第一に私は、ゲイつてものを肯定しなければいけないと思つてたんですね。というのも、同性愛を肯定する文脈でよく言われるのが「同性愛でも、異性愛でも、愛には変わりないじゃないか」

って言うわけですね。ところがこれって、ある意味では同情であって、例えば、皆さんが結婚していると、全く知らない他人のカップルから、「私たちが愛しているように、あなたたちの愛もとてもすばらしいのですよね」って言われたらどう思うかっていう話なんです。「いや、あなたたちの愛は知らないけど、うちはうちで楽しくやっていますよ」っていうのが、普通の意見ではないかと思うわけです。つまり同性愛も異性愛も愛には変わりはないんだっていう意見は、どちらの違いも消してしまう暴力的な言葉、同情の押しつけになってしまふ可能性があります。

第二に性愛(sex)の評価については、二丁目の中でよく言われるのは「あんなのは、コミュニケーションの一つよ」っていう話ですね。実際、私が聞いた話の中で一番多い方は、三千人から五千人ぐらいとって言ってました。それが本当なのかどうなのか、もう、知りもしないですし、そもそもコミュニケーションだということならば、私も何千人の方々ととってきたもので数には興味もありません。

第三にノンケ生活で、恋愛話を男女置き換えて話すのが辛い、苦行だという話です。金曜の夜に二丁目に来る人は、そこで本音の話ができるわけですけど、月曜日から金曜の終業時刻までは、その人にとってはいわゆる社会的「普通の生活」をさせられているわけですよ。その中で、「○○さん、最近の恋愛、どうなの？」って聞かれた時に、実は、男同士、女同士でカップルなんだけれども、ノンケ生活の中では、自分の恋人の性別を置き換えて話さなければならぬ辛いみたいな話は、結構カウンセラーの中から聞いておりました。

この一、二、三のうち、一はやっぱり周りからのプレッシャーみたいな話で、二はある意味での開き直りみたいな強さみたいなのがあって、三については、結構ほとんどのゲイの人が抱えているストレスというか、普通に会社で勤めている人には、結構あるあるの話なんです。例えば「ホモ」という言葉がありますが、私が、あの二丁目のカウンターで、「あなたたちホモは」って言ったら、多分、嫌がられると思います。私たち僧侶でいうなら、「私たち坊主はさ」みたいなことを言うと自虐的な雰囲気を受け入れられると思いますけど、一般の方に「貴方たち坊主はさ」って

言われると、多分、攻撃的な気持ちになると思います。つまり、仲間内にならないと話せないってことですね。

それと同じで、「ホモなんで」っていう自虐の感じは「どうせろくなもんじゃないんだから、ろくなもんじゃありませんよ」という仲間内の合い言葉みたいなニュアンスがあります。ただ、酒を酌み交わすその時は自虐的な繋がりや生まれるかもしれませんが、多分、家に帰った後が大変なんです。実際に「本当に自分はホモだから辛いっていう気持ちになる」なんてことをカウンターで私と一対一で、夜中、三時ぐらいですかね、そんな話になることもありました。こんな文化が、二丁目にありました。

## 「この街では女性に等しく価値がなご」

それから、二丁目には、女性というものには等しく価値がないという不文律があります。誰も女性に対して直接的には言わないですけども、この不文律を知らずに飲んでいたりすると、露骨ではないにしろ嫌がられます。まず、男が好きな男達のための街であるということですよ。

それからゲイの当事者の方たちの話をまず邪魔しないっていうことは、やっぱり大事だろうと思います。街の主を尊重するということですね。二丁目は一体誰が集まっている街なのかっていうのを知っておくのが必要ですよ。

それから、やっぱりゲイな人と話したい、さつき、オコゲの話をしましたけど、ゲイであるからこそついて行きたいという女性がいろいろいるわけです。そういう人には「聞いてもらおうなら、礼儀として、ちゃんと飲んで、ちゃんと支払っていきなさい」としっかりと説教する、かなり義理堅い人もいろいろいる街ですよ。お金こそが全てという建前を守りつつ、女性として二丁目に来て、女性として喋っている時に、女性であるが故に自分はこの人たちにとって価値がないんだということが理解できているならば、逆張りの可愛がつてあげようということになり、ものすごくその場が盛り上がるということもあります。そういう建前を守る人にはしっかりと優しい、それが私の二丁目という街のイメ

ージでした。

## ゲイバーをやりながらいろいろ考えていた

そのような感じで二丁目でいろんなことを考えながら、ゲイバーをやっていたわけですが。一番忙しい日だと、十人くらいで手一杯のお店に二十人くらいいらっしやることもありました。こんなに人数がいると、本当に考えながらやるってというのは、かなり面倒くさくなります。例えばノンケの人には、男性同士がキスをしているという場面はやはり違和感があると思います。この違和感っていうのは、自分が理解できないようなことを理解するためには多分大事にしなくてはいけない感覚です。なぜかというところ、同性愛の指向を持つゲイの方には、異性愛が気持ち悪いって人もいたんです。

ここで、先程申し上げた「今日は興奮しませんが、来年は分かんないですよー」という返しです。ゲイバーをやりながら、いろんな文化に触れて考えたところで、実際に言い寄られた時とかは、こういうふうに戻っていたわけです。これは本当によく考えた末の答えなんですけれども、どうしてこの応答にたどり着いたのかというと、ある時に肯定しなくていいやと思ったんですね。その人がゲイであるか、レズビアンであるか、バイセクシャルであるかというのにはある意味でどうでもよい話で、もっと大事なのは、その人が、自分がゲイであること、あるいはゲイが存在している理由をどう考えているかということです。つまり異性愛じゃないから、異常ですね、大変ですねという話では全くなくて、「性愛のことばかり人考えてたら、生活大変ですよ」ってことです。それに病気の話とか、猥褻が、なぜ性愛を抑えようとしたか、みたいな話をしながら「性愛」だけに浸ってしまう生活の怖さをお話しするようになりました、途中から。

さつきも言ったように、そもそも酒場で、「あなたがゲイだから、私はしゃべるんです」とか、「レズビアンだから、



しゃべりましょう、楽しくやりましょう」なんてセクシュアリティを基準に目の前の方と話すことはないですよ。最初三か月ぐらいは、本当、目の前に初対面の方が来るわけですよ。一応ゲイ向けのお店ではあったわけですが、これも、扉を開けて、「ゲイです」と言ってお客さんが入ってくるわけじゃないですから、実際のところのセクシュアリティは分らないです。そこで私はカウンターに立ちながら、一挙手一投足を絶対に見逃さないとあって、「この人はゲイっぽいかな、違うかな」とか考えながら、「逆にトランスジェンダーの方なのかな」などと考えたりしていました。そうすると話も盛り上がりませんし、それが良い話につながることもありません。そんなことより、普通にしゃべりながら、お酒を飲んでもらって、ポロっと、何かあったときに、「それって、どういことですか」みたいな感じでその人の感覚をつかまえていく。私は良くも悪くも当事者ではなかったので、飲み仲間として応じられるように、カウンターに立っていたということになります。セクシュアリティってものは、変化をしていくものです。

それから、僧侶として性愛についてどう考えればいいのかも悩みました。一つ気がついたのは、性愛を発散することは僧侶としては肯定しないが、全否定もしないということです。同性愛の否定をする人というのは、それが汚らしいもの、嫌らしいもの、あり得ないものっていうような形で否定をする方が多いと思うんです。同性愛の人からすれば、同性愛っていうのは多分気持ちが悪いものっていうのは、ある意味でしょうがないのですが、仏教の立場からすれば、どちらの性愛も肯定できるものではない。ただ、世間にはちゃんとありますよねっていうことで、全否定するものでもないというところで、僧侶としては、こういう立ち位置がいいのではないかと考えております。自分には妻も子どももいるということも含めて。

そういうわけで同性愛に対しては、否定も肯定もしませんけれども、人間が人間として話すだけなので、そこにはセクシュアリティは必要条件ではなく、礼儀をしつかりと守って話す。その人が、例えばゲイっていうことで悩んでいるのであれば、「なんで、ゲイで悩まなきゃいけないんですかね」みたいなところの現状把握から少し話し始める

ということを、ゲイバーで一年ぐらいやっていたということです。

## 仏教の「性」問題

仏教で性の問題をどのように考えるべきなのかなというところで、こんなのが考えられるんじゃないかなと思うところを少し話してみたいと思います。まず、僧堂での修行。修行生活において、異性愛でも大変なんです、同性愛の人はもっと大変なでないかと、あるいは授戒における四衆ですね、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷のその四つの分け方しかないけれども、トランスジェンダーの中で、自分の性別を不安定に感じている人は、一体どこに分かれるのか。

また位階の授与も問題です。女性と男性に位階がありますけど、そうではなければとか、どこを区切りとして、男女を分けているのか、とか。

それから、例えば、亡くなった方は女性でしたってことをご遺族から聞いていたのに、友達から聞くと、実は男性だったんですよというような事例が考えられます。そうすると、それを遺族の人に説明すべきなのかどうか。それとも、そのまま女性として弔うべきなのか。実際は、男性で男性として生活していたことを聞いた限りにおいては、やっぱり男性として弔うべきなのではないかという問題を突きつけられる。これは「死後のカミングアウト」と呼ぶべき問題かもしれません。本当は地元では隠しておきたかったのだけれども、東京ではカミングアウトして生活をしていた事実がある場合、それを両方、僧侶が知ってしまった場合、どちらに基準を合わせなければいけないのか。

異性愛、かつ、ストレート。嫌な言い方になりますけど、この文章は一般的な「我々」ではないっていうことを意味してしまっています。ストレートっていうのは元々はセクシュアルマイノリティの側から社会の主流である人々を指す、普通に生きている実直な人とか堅苦しい人という意味の言葉として使われ始めたのですが、片仮名でストレート

トと書くと「真っ直ぐ」という意味を持つてしまうので、ストレートではないとされる人々が曲がっているという誤解が生まれてしまっています。そうやって普通と異常の区切りをつけてしまうと。

本当はその我々という言葉の中に人間が全て入ってるはずなんですけれども、この世の中は異性愛で性自認が男性だったら身体は男性であるのが普通の世の中になってしまっているのです、その「われわれ」には入っていないことになってしまふ。その困難って、じゃあ、一般的という枠組みに入らないことによる困難って、何なのか。これが、私の考えてる、性にまつわる問題かなって、今のところ、思っています。

「僧侶が性を考えるべきか」、私はやっぱり考えていきたいなと思っています。それはなぜかというと。まず、誰かの在り方、トランスジェンダーであれ、ゲイであれ、レズビアンの方であれ、様々あるわけですけども、一方で「そんなものはもうあり得ないから、話す必要がない」と、誰かの在り方を自分たちと切り離して排除する方もいると思います、一方の在り方を排除するやり方で私たちに慈悲と智慧は生まれてくるのだろうかと考えると、少なくともお釈迦様はそんなことはなさらないのではないかと、正直、思っています。

あとは医療の話です。お医者さんが子どもを判断しようとして判断がつかない場合、両親に「どうやって育てますか」と尋ね、保護者の判断で性別が決まるということがありますが、私たちが聞いた時に思ったのですが、私たちの持っている、例えば私だったら男っていう性別があると思っっていますが、一体その認識はどこから生まれてきたのかとか、なんで男になったのか。別にXY染色体を持っていれば男になるということでもないので。

男であるという原因・根拠が突き止められないのに、なんだか分かった気になって、自分は男だと思っている。そういうことに気づいた時に、それって、男が男だと思っただけで男としてこの社会を生きている限りは、そんなことに気がつけないで、(性別に関して) 悩まなく生きて死ぬことができますよね。当たり前なんですけども、性別っていうものが、男女ってものがこの世の基準であるがゆえに悩まざるを得ない人の苦しみに気づかずに、私たちは死んで

しまいます。しかし性別があるということで苦しんでいる人がいて、私たちがそれに気づいた限りにおいては、何かやれるものがあるのではないかと思うんです。

そして、『女人なにとががある、男子になにの徳かある』（『正法眼蔵』上巻第八「礼拝得髓」曹洞宗宗務庁二〇二〇年）。これは、道元禅師のお言葉です。当時、鎌倉時代ですから、女性は基本的に成仏しなと言われる世相の中で、そこに男性に本当に徳があるのか、女性の身体に咎があるのかというような、喧嘩の売り方をしている文章があります。そんな違いはないのではないかとところで、道元禅師は、仏の徳を礼賛することはすばらしいって仰っております。そこを読んで思うことは、男と女の区別とか、性を別にするってことは、例えば銭湯とか、男女分かれていたほうがいいと思うんですが、それは便利だからとか安全上の理由でそうなっているだけです。突き詰めていけば、咎とか徳とかって言ったときに、それは男女の別にあるわけではなく、人間としての行為そのものに関係することですよねと。「そしたら、男女の差というものは仏教にはやっぱり関係ないのではないか」というところに落ちて着いてしまったので、当事者の苦しみにそういったところから話をしていけたらいいなと思っております。

## 「お坊さんが大丈夫って言うてくれたら、助かるわ」

これが最後です。カウンターに立って、私が一番うれしかった一言があります。私のことを伝統を背負ってるお坊さんだと思ってくれているので話して下さったんだと思うんですが、田舎に帰っても未だに親戚つき合いつてなかなかできないという話から始まったんです。子どもの頃から「女っほい、女っほい」って言われ、東京に出ると言えば「なんだ、おまえ、家も継がねえのか、このやろう」みたいなことを言われる。それでも、おじいちゃん大好きだったから、お墓参りには行く、みたいな話の流れがありました。私はお釈迦様だって家業継いでないんで大丈夫ですよみたいな冗談を返していたんですが、その方がふと「お坊さんから『大丈夫。あんたたちはちゃんと人間だよ。良い

人間なんだ』って普通に言ってくれるのは本当にありがたいね」とおっしゃる。「いろんなお坊さんが大丈夫って言うってくれたら、助かるわ」と言ってくれた時は、「ああ、やっててよかったな」と思いました。

最終的に、私は一年と三か月ぐらいバーをやっていたんです。最後の営業とかは、本当に目の前の人がこの誰なのか、本名はもちろん仕事も知らないんですけど、ただただ盛り上がるというか、楽しい話をして、少なくとも、扉を開けて、「こんばんは」って言ったときの顔よりは良い顔で家路についてくれる、みたいな、そんな空間をここに作りたらし、つくれたのではないかなと思って、終わることができました。

辞めて三日後ぐらいに、今所属している部署の課長から電話がありまして、「君、暇してるんだったら、来なさいよ」ってというようなことで、とんとん拍子に今に至るっていうのが私の人生で、意外と、最初、曹洞宗のエリートコースだなんて訳の分かんない不遜なこと言っていました。割と、というかだいぶ外れた生き方をしています。あと、また、曹洞宗宗務庁という日本の曹洞宗寺院を包括し、その代表として業務を行う職場で働かせていただいております。ある意味で曹洞宗の中心と言われることもある場所にいますので、また真ん中でずれながらいろいろやれたらなと思いつながら、生きている感じでございます。ちょうど時間になりましたので、これで一旦終わらせていただきます。ありがとうございます。

司会 では、本多上人、ご講演いただき、ありがとうございます。

それでは、研究員の皆さまの中で、ご質問等あります方は、挙手をしていただいでご発言いただけたらと思いますので、お願いいたします。どなたか、ご質問のある方はいらっしゃいますでしょうか。

質問者① ありがとうございます。大変勉強になりました。

いろいろ伺っていてまず思ったのが、さっき、四人の写真が出て、男性か女性かという質問がありました。一番上ではるな愛さんが出てましたが、テレビか何かで、身体は女性、要は手術をして女性になって、でもあえて男性の戸籍を選択するという話を聞きました。実は女性になろうと思ってたけども、なったらなくて、もう戸籍まで女性にするということにこだわりがなくなり、グラデーシヨンのようなものだと考えてるから、あえて両方反対の性を選択してるといような話でした。そのときにすごく納得したのは、性自認というか、性的指向もなんでしようけど、グラデーシヨンだという言い方で、要は、男女っていう括りがそもそも無理なものになってる部分も大きいのかなと思っただけというのが感想です。

一つ質問なのは、最後のほうの話で、具体的などころなんですけど、例えば家族は男性として育てようとして、でも本人は性自認が女性だったとして、その方が亡くなり、家族は男性として、要は葬儀なり供養なりしてくれというような形でお話があるけども、本人はもう亡くなってからあれなんですけど、はっきり女性としての振る舞いをしたっていうときに、実際、お話を聞くしかないのかもしれないですけど、どういう対応を、そういった案件があったときにされるのかというところを、具体的に伺ってみたいなと思いました。よろしいでしょうか。

**本多** 私はまだそういった事例に出会ったことはないんですけども、曹洞宗で差別戒名の事例がある中で古いものだと江戸期の最初ぐらいのお名前があります。考えてみれば、絶対に当時もいらっしゃったはずなんです。今お尋ねになったような方がいらっしゃるはずなんです。ということは、私たちは、性別が分からなくても、弔いはできるんですよ。仮に私が男性だとして、男性として亡くなって、居士号、信士号が付いたとしても、実は私は女性だったんだっていう生き方の違いはあっても、弔いはまずできる。というか、むしろもう多分やっていると私は考えています。それが一つと、そもそも、お戒名って一個じゃなきゃいけないのかなっていうのがあります。ていうのは、ご遺族

のためにお戒名を授けるとき、私だったらまず、(曹洞宗の場合として)戒名の部分と、位階と院号と諸々ご説明はするんですけど、そもそも位階とか院号って、われわれ僧侶側からお奨めするのではなくて、お施主さんである遺族から、「この人は男性で、七十歳で、うちの家は院号家だから、じゃあ、和尚さん、院号をお願いします」って言われて付けるのが、多分、号であったり、位階だと思えます。そうすると、僕らが責任持って付けるのは、教義的にいわれる戒名の二字だったはずなんです。そうしたときに、じゃあ、この人の性別があるから、戒名はこう変えましょう、ああ変えましょうってなるのかっていったら、確かに文字の使い方みたいなのは男性・女性あるんですけども、実際のところ、そこに男女の違いをしているかといえ、そうではないんですね。これはだから甲い方の問題で、実家の方々が男性として吊ってほしい、東京の友人たちだったら、女性として吊ってほしい、ってものがあるんであれば、そこはもうあえて一緒にくつつける必要はなくて、そこで「どう甲えるか」なので、私だったら、(追贈という意味で)二回葬儀をやると思います。

これは諸説あるというか、やり方のあれこれだと思うんですけど、宗門の公式見解ではありませんが、そもそも戒名は誰が授けるんだってなると、師匠が弟子に授けるものですよ。「宗派から何を言われたって、俺が弟子にするんだから、この人をちゃんと導くために戒名を授ける」っていうことを師匠の覚悟として考えれば、弟子にどんな戒名を授けるのかは誰に何を言われるじゃなくて、こういうやり方もある、ああいうやり方もあるということ踏まえながら師匠として責任を持つ。宗門としては、その補助としてセクシユアリティについての見解を出すのはありだと思います。でも、(師匠としての)あなたが弟子に戒を授けるんだという部分は、多分、伝えていかないといけないことなんじゃないかなと思います。

だからやっぱり、というか、これはもう、私も一寺院の僧侶として思うところありますし、また曹洞宗の公式見解方針っていうのも勿論あると思うんですけど、こと戒名に限っては、そのお寺が過去帳に書いたり、そこで甲い続け



るわけですから、誰が責任持つかといったら、やっぱ住職の責任においてやってもらうしかないんじゃないかなと思っております。

質問者① ありがとうございます。

質問者② 貴重なお話、ありがとうございます。肌感覚で構わないですが、外の人間が理解するために、いろいろな分類であったりとか、LGBTもそうなんですけども、分けて考えるということを、当事者の方々はどのように、積極的にそう理解するために分けたいと思われているのか、もしかしたら、周りのお節介りとか、その視点自体、特別視してのような感じもあるなと思うんですが、いかがでしょうか。

本多 先ほど、所長様ともお話をしていたんですけど、私は意外とお坊さん業界で言う、宗派の分け方と似ているんじゃないかなと思っていて、檀家さんから見るときに、「うちのお寺は日蓮宗だから」って堂々と言える人がいれば、「ちょっとよく分かんないけど、良いお坊さんだよ、うちの住職は」って言う人もいると思うんです。多分、仏教界全体が題目をやっていると、お檀家さんもいれれば、坐禅する宗派もあるらしいよ、念仏やる場所もあるらしいよ、って知っている檀家さんもいるというような感じで、当事者の方も、意外と、そういう分け方とか、「自分はゲイなんだ」、ゲイプライドと言ったりしますが、それによってアイデンティティを保てる人もいれば、「いや、別に普通に会社で仕事してるし、普通に生活してるんだけど、自分が楽しむのが一番大きいのは、男と何かしてるのが楽しいんだよね」みたいなところで、性愛の部分だけ楽しみ方が違うんだよっていうように理解してる人もいます。

ただ、唯一、これはあんまり言わないっていうか、お店では話しませんでしたし、目の前の方を勝手に判断するのは失礼だと考えていることを踏まえて申し上げますが、セクシュアルマイノリティの方たちと話していると、やっぱり、幼少期とか、思春期には他者との違いってものを大きく感じる時期があったと思うんですね。そのときにそのまますんなりいく人も稀にはいるみたいですけど、やっぱり皆さん悩んでいると思います。

そんなの、ゲイじゃなくても同じじゃないかという意見もあって、異性愛でストレートの人だって、ちょっとした違い、何なら、小学生だったら学校でうんこしただけでいじめられる、みたいなことがあります。ただ、その中で他人と違う性愛があつて家族にも話しづらいという要素があつたからこそ、余計に苦悩が広がるっていう経験をしている人が多いとは感じました。

思春期の乗り越え方っていうのはそれぞれあるので、簡単に乗り越えた人からすれば些末に感じることもすらありません。例えばLGBTっていうものに配慮をしよう、一番顕著に表れたのは、「誰でもトイレ」って呼ばれるものがありますよね。今、「多目的トイレ」って言われてますけど、あれも「LGBTトイレ」っていう名前が付いちちゃって、虹色のマークで、男半分、女半分みたいなマークが付いている。当事者の人が言ってたのは、「私は、これじゃない。こんなに虹色ではないし、男が半分、女が半分ってわけじゃない。男は男だし、女は女なんだ。なんで、こんなふうにされなきゃいけないんだ。見世物じゃないよ」みたいなことをおっしゃっていました。つまりは余計なお節介というか、そもそもそうやってマークを分けるっていうことは、われわれ異性愛でストレートな社会と、二丁目のゲイの社会、他のセクシャルマイノリティの世界というのは違う世界で、だからマークにして区分けしますよっていう話に感じてしまうわけです。また逆に、性別の表示がないトイレがあると安心するという当事者の方もいます。

質問者② 自分のプライドを持って、そのとおり受け入れている方も多いけども、あまり強調しすぎる社会は、逆に

差別につながりそうだという理解でよろしいですか。

**本多** すみません、あんまり答えてられてなかったですね。そもそも、私たちの社会に「みんな」いるので、(当事者ではない人間が勝手に考えた)特別な行動は必要ないと思っています。ただ、見た目に分かってしまうトランスジェンダーの方に関しては少し別です。そもそも身体のことなんで、トイレなど性別を強く意識させられる場所に行く度に、自分の身体に違和感を抱え続けなきゃいけない。胸が何かに当たる度に、「なんで、ここにあるんだろう。早く外れればいいのに、外せないけど」みたいなことをずっと悩まなきゃいけないというのがあるので、それに関しては、私たちが想像もつかないようなところが、身体のこととしてあるので、より意識的に気をつけていくべきだと思います。

同性愛に関しても、その人の内部事情がものすごく強いので、話を聞かなきゃ絶対分からないってことがあります。それは逆に、あまりこちらから話題にしないほうがいいってことでもあります。話題になったときに自分らが反応できるように用意は必要だと思いますけど、あえてこっちから「何かやりましょう」みたいなことは、ある意味、ちょっとお節介な感じが、正直します。

**質問者②** ありがとうございます。

**質問者③** 一点伺いたいんですけども、曹洞宗さんのほうで、例えば、修行の道場とか、檀家さんに、人権、LGB Tの関係で、何か変化というか、取り組みみたいなのってというのは、何か動いてらっしゃるのでしょうか。

**本多** 着替え場所なんかには、ちょっと気をつけるようになってくるかもしれないです。高校生とかが本山に泊まりに来る時などのこと、ちょっと聞いたことがあります。とはいっても、そもそも学校教育自体が配慮を始めているので、それに引き続き、学校として本山に来る際には、先生たちから「こういうのを準備してください」とかって言われて、本山側が準備することなので、曹洞宗が自発的にどうのこうのついでというよりは、学校からのお願いに対応したという感じです。

宗務庁主催で行っている坐禅会なんかだと、坐禅をするときの距離感であったりとか、トイレの案内を変えてみたりにかかっていうような配慮をやったりはしています。

**質問者③** ゲイバーのお客さんで、坐禅を試してみたいって方もいらっしやいますか？

**本多** お店でやりました、椅子で。

**質問者③** そうですか。お酒を飲みながら行うのですか。

**本多** 飲みながらはやってないです。最初、飲まずにちゃんとやってから、落ち着いて、「じゃ、とりあえず、飲みますか。ここは酒場なんで」みたいな感じで、飲むって感じでした。

**質問者③** ぜひ参加してみたいと思います。ありがとうございます。

質問者④ 先程の質問と少し被りますが、修行施設、先ほど、永平寺でご修行されたとおっしゃってましたが、日蓮宗でも、日蓮宗の僧侶になるために、三十五日の修行を、信行道場というのがあり、そこは、男性と女性で、日程を変えて行っております。そういうことではできませんけれども、いわゆるレズビアンの人とか、ゲイの人がどうするんだという問題があると思うんです。

そういったことで、去年の十月に、真宗大谷派の女性室というところがあって、そこに当研究所として聴き取りに行つて、そこで聞いたのが、真宗大谷派では、修練という、前期・後期、一週間か二週間ずつ修行があるらしいんですけど、浄土真宗自体が社会問題に対して非常にアンテナを張っていて、すぐ対応するという性格があるので、基本的には修練っていうのは団体生活なので、お風呂なんかも男性は男性と一緒に入るらしいんですが、そこにゲイの人もいることも想定して、LGBT問題に対応するためにシャワー室を造つて、対応するということもしているみたいなんです。

つまり、お金をかけて、そういったことに本気で取り組まれている。

女性室のしている広報誌、『あいあう』というのがあるんですけど、そこでカミングアウトをできる場所を設けているんですよ。宗派として、「ゲイの人はいますか」「レズビアンの人いますか」っていうふうなことを尋ねるのではなくて、「カミングアウトしたい人は、こういう場があるから、よかつたらカミングアウトして、吐き出したこともあるだろうから」ということで、僧侶がわざわざ吐き出す場っていうのがあつたりもして、本気で取り組んでるなと思つたんですけども、そういった話を聞ききました。

単純に、日蓮宗が大体五千ヶ寺、僧侶数が八千人と言われてるんですけども、真宗大谷派は九千何百ヶ寺と分母も多いので、それだけ僧侶も多いですし、曹洞宗さんも一万五千ヶ寺だつたりするので。

単純に数として多いとは思いませんけれども、僧侶がカミングアウトしたりとか、修行施設でこういう対応してい

るような動向があったら、聞きたいなと思います。

**本多** 私が知ってる二丁目のおねえさん方は、「そんなの、大きなお世話よ」って言うと思います。強いので（笑）。ただ、カミングアウトに関しては、当事者にとって本当に大変なものです。ノンケであれば、「男性です」「女性です」「男性なので、女性が好きです」などを自己紹介で話すかといったら、話さないですよ。それ以外に、じゃあ私とゲイの人たちの違うものがあるとしたら、何なら性格の違いのほうが大きいぐらいなわけです。社会生活に違いなんかないですよ。じゃあ、あえてカミングアウトに特化した相談事業をやるべきじゃないかっていったら、それはさすがに違うと思ってます。むしろ、セクシュアリティも含めた悩みに応じることができる相談窓口を増やさなければと思います。

また修行生活の中でも、そもそも、もうずっと、私たちが問題に気付けなかった、あるいは無視していただけで、ずっとあるわけです。ゲイというセクシュアリティがあっても、それで修行生活が成り立ってきたことが事実としてあります。私は男女で僧堂を分けなきゃいけないっていうのは、それだけ間違いの回数を増やさないと話だと理解しています。なぜって、男性用の修行道場であっても観光のお寺としての側面もあり、参拝者として女性が来られます。うちで言えば、坐禅会に来る参禅者に欲情する修行僧がいたりするわけです。そういう問題はやはりあるので、間違いが起こる回数を減らす、絶対数をゼロにするとかじゃなくて、回数を減らすために、まず、男女は分けておく。その中で同性愛の指向を持つ人もいるんだけど、その人たちは数が少ないが故に問題が少ないという状態があると思うんです。それをあえて引き出して、実名でカミングアウトをしてもらって「私はこんなことで悩んでいます」という告白を、改めて行っていくことは私自身はおすすめしないうです。ただ、それを受け入れられない状態じゃない、同性愛者であっても修行ができますよってという環境は、作って周知しておかなければならないと思います。

直近の話でいうと、住職候補として育ってきたお寺の子どもという立場で、ゲイの当事者として困ったことについて、インタビューをさせてもらうんですけど、別に匿名でもいいと思うんですよ。もっと言えば、住職が「はい、私はゲイです」って手を挙げることで、正直メリットが見当たらないんですよ、今の日本社会を考えてみると。

檀家さんの中にどういふ方がいるか分からないところで、ゲイと告白することによるデメリットのほうが大きく見えてしまうと思うので、正直、私だったら、絶対言わないと思うんです。

世の中が、ゲイでもいい、レズビアンでいいっていう世の中になったとしても、人と違うことをあえて口に出すっていうのは怖いことなので、カミングアウトをムーブメントにはしないほうがいいと思います。やっぱりお坊さんへの期待が強くなってくると「お坊さんも、もっとカミングアウトしてください」といわれて、それが社会的に正しいとされるかもしれませんが。そうすると「カミングアウトしないお坊さんは、だめなやつだ」となるでしょう。そう言った時に、ただでさえ当事者としてつらい思いをしているのに、さらにお坊さんという属性によってつらさが増すことがあったりすると思います。当事者の苦しみを増やしてしまう可能性があることを考えると、私はあんまりそういうのは良くないんじゃないかと思っています。

**質問者④** ありがとうございます。

**司会** では、まだいろいろあるかと思うんですけども、時間も長くなってしまっているかと思しますので、こちらで一旦閉じさせていただきます。本多上人、本日はどうもありがとうございます。

**本多** ありがとうございます。